

ラジオに現れた「漫才」 ——戦前期 JOBK における演芸番組の構成に着目して——

日本大学 後藤美緒
mgoto@chs.nihon-u.ac.jp

1. 問題関心と本報告の目的

「近代漫才の父」と呼ばれる秋田実¹ (1905-1977、本名林広次) は、晩年、自身の制作活動を始めた時期をふりかえって次のように述べている。

夢というのは、ユーモア読み物として漫才台本を雑誌に載せること。もう一つは、ラジオで漫才が放送されること。この二つと一緒にになって舞台の漫才が、内容形式ともに向上し、新しい大阪の娯楽となっていくに違いない。(秋田 1975: 103)

秋田は雑誌への台本の掲載と漫才のラジオ放送が、1930 年代の仕事の目標であったと語る。大阪ではながく演芸作品を活字化し出版する土壌があった(永嶺 2004, 吉川 2010)。秋田はそれに加えて、ラジオが必要だと感じていたとここで述べている。

1925 年に始まったラジオ放送は、徐々に契約者を増やし、1935 年には全国で 2,304,479 件に達した²。受信者が限定されていたものの、受信機があれば、聞くことができるラジオは、既存のメディアである書籍にくらべて、広範囲で同時に聞くことができるメディアである。秋田は人びとに新しい経験をもたらしたラジオに興味を寄せていた。

1905 年に大阪市に生まれた秋田は、1923 年に旧制大阪高校に進学する。高校時代は、幼少期から続いて演芸に親しむと同時に、社会運動に参加した。その一面は 1927 年の東京帝大入学後も続いている。帝大入学した秋田は、学生団体東京帝大新人会〔1918-1929〕に参加している。高等教育機関の進学率が 1 パーセントにも満たない時期に教育を受けた秋田は、なによりもまず教育エリートといえる。社会科学の理論の探求と実践を目指して活動した新人会はそうした、学生の一部によって運営されていた。そのため彼らの活動は、他者との卓越化という一面を持つてはいたが、既存メディアを用いながら社会的属性を超えた共同性を模索する試みも展開した(後藤 2014)。学生時代からの秋田の営みをとらえると、秋田は高等教育の思想史においても重要な人物として位置づけられる。

わけあって東京帝大中退後、秋田は JOBK〔大阪放送局、以下 BK〕でラジオ番組制作に

¹ 秋田実にはペンネームであり、学生時代は林熊王というペンネームを用いることもあった。大学中退後に、時事批評を執筆する仕事のなかで、春野仲明、夏山茂、夏輪篤、冬賀北蔵などいくつかのペンネームを用いており、秋田実はその一つであったという。今日、もっとも人口に膾炙しているのが秋田実であるため、秋田実で統一する。

² 1935 年度末の加入数は以下のとおりである。全国 23,044,479 件 (有料 2,267,552 件、無料 36,927 件)。東京は 662,924 件 (有料 957,290 件、無料 7,372 件)、大阪は 662,924 件 (有料 655,552 件、無料 7,372 件)。